明快新聞

明快志塾

平成二十五年四月五日発行
編集者　明快志塾　勘定方　澁谷日出喜

# 第二回　保護者会レポート

## 報告者　明快志塾　土井朋哉先生

### 保護者会の報告をさせていただきます

去る三月九日（土）に開催された第二回保護者会のテーマは、「受験生の保護者としての心構え」でした。まず昨年度の高校受験を振り返り、その後、主に進路決定と学習指導についての話をしました。以下に未参加の方にも役立つ内容のいくつかをご紹介します。

### 学校選びで保護者にして欲しいこととは？

特に高校選びの場合、保護者の方々には、いろいろな高校を見ることをおすすめしました。とにかく実際に足を運んで「本当の学校の姿」を見て欲しいと思います。実際の学校の姿を見るためには、入試説明会などのイベントよりも、「学校公開」がおすすめです。実際の教育環境を見学する中で、自分の子供の学校生活が心に描けるような高校を見つけることができれば、それに勝るものはないと考えます。

### 『学校公開』のチェックポイント

では、実際に「学校公開」に参加した際に役立てていただけるように、具体的なチェックポイントを挙げてみます。

①挨拶をしてくるかどうか。

生徒からの挨拶ももちろんですが、先生からの挨拶があるかどうかも大事です。挨拶をしてくる先生が多い高校では、たいていの場合、生徒も挨拶ができます。そのような高校は学校全体の雰囲気がとても明るいところが多いようです。

②校舎内の掃除が行き届いているかどうか。

先生たちの指導が行き届いていれば、ゴミが散乱していたり飲みかけのペットボトルが放置されているようなことはないはずです。

③授業中、寝ている生徒がいるかどうか。

先生の一人ひとりが授業にどんな工夫をしているか、生徒たちにどこまで責任を持っているかを測る一つの目安です。

④校内の掲示板の貼紙などに、期限切れのものがないかどうか。

情報交換が適切に行われている学校では、掲示板に期限切れの情報などは少ないはずです。

### 明快志塾がまとめた近隣高校の印象報告

保護者会では、上記のような注目点を踏まえ、明快志塾がまとめた近隣高校の印象を、資料として配布しました。対象校は、調布北高校、豊多摩高校、調布南高校、武蔵丘高校、鷺宮高校、新宿高校、忍岡高校、国際高校などです。これらの資料はご希望があればお見せできますので、個別相談や次回の保護者会の際などに、ご遠慮なくお申し付けください。

### 保護者会の印象　今後の会への抱負

今回報告しました「学校公開のチェックポイント」については、実は保護者の方からいただいた御要望にお答えしたものでもあります。このように、これからもさまざまな御要望に応えられるような保護者会にしていきたいと考えています。保護者会をより充実したものにするために、ご意見、ご要望など、是非ご遠慮なくお寄せください。

また、今回の保護者会で、個人的に印象に残ったことは、幾人かのお父さんにも来ていただいたことです。平日の相談にはお忙しくて、なかなか来ていただけなくても、週末に開かれる保護者会ならご参加いただけるようです。来ていただいたお父さんには保護者会後に個別相談を行いました。普段の生徒の状況をお知らせする非常によい機会としてご活用いただけたと感じました。

このように、今後の保護者会にもぜひ積極的にご参加いただけますよう、お願いいたします。

## 背伸び本ののすすめ　第二回

### 『フランス革命』遅塚忠躬

何のために勉強するのか。数学の公式が、古文の文法が、日常生活に役立つことがあるのか。特に、遠い外国のはるか昔の出来事が今の私たちの暮らしに何の関係があるのか。実にもっともな質問だが、明確な答えが得られることは、まれだ。

だがこの『フランス革命薬』は、その問いに答えようと試みた、実に珍しい感動的な本である。

当然フランス革命について書かれているが、退屈な歴史の授業のように、おきた事件を年代順に挙げるのではなく、なぜおきたのかをずばりと示してくれる。しかも明快なベクトル図解付きだ。思わず目からウロコが落ちそうになるが、後知恵と言えなくもない。

大事なのはここから。自由と平等の理想を掲げつつ、恐怖政治やナポレオン戦争など多くの人々の血を必要とした劇薬的な革命が、果して本当に避けられなかったのかと問う。歴史の必然性、人間集団の傾向性などの難問に直面することを恐れず、むしろそこに歴史を学ぶ意義を掲げる。

その難問に答えるヒントも示されている。著者は「歴史を動かしているのは人々の熱情であり歴史を学ぶとはその熱情を知り感動することである」と語り、フランス革命の時代を生きた人々の声に耳を傾け、その姿に涙するのである。

つまり歴史を学ぶ意義とは、後知恵の視点から、なぜそのようなことが起きたのかを知り、状況に巻き込まれた社会の視点から、その歴史的過程は、果して必然なのか偶然なのかを考え、一人ひとりの個人の視点から、その時代に生きた人々に共感することなのである。

ここにいたって、著者の歴史への誠実さに、目からウロコどころではなく、熱いものまで流れてしまう次第となる。

岩波ジュニア新書・刊